

# 学会ニュース

## 目次

・ 第33回大会および第34回大会について	.....	1
・ 国際18世紀学会グラーツ大会報告		
国際18世紀学会第13回グラーツ大会に参加して	小田部胤久	..... 2
第13回国際18世紀学会に参加して	逸見 龍生	..... 5
【エッセー】		
・ 18世紀のロシア文学、ジャン=ジャック・ルソーの在る風景		
	金沢美知子	..... 8
・ ゴンクールの歌麿論、そして、グラヴロ論・・・18世紀のファッションを見る眼		
	木村三郎	..... 10
・ 事務局より		..... 13

## 第33回大会および第34回大会について

今年度の第33回大会は、2011年6月18日（土）、19日（日）に立教大学で開かれ、盛会のうちに終了しました。開催校責任者の坂倉裕治会員をはじめ、立教大学の皆さんに厚くお礼申し上げます。

共通論題（「表象、その多義性、変容と展開の諸相」）のコーディネーター、鷲見洋一会員、およびほかの発表者、司会者の皆さん、コンサートを企画して下さった森立子会員、出演者の皆さんにもお礼申し上げます。

来年度の第34回大会は名古屋大学で開かれる予定です。開催校責任者は長尾伸一会員です。詳細は「学会ニュース」次号でお知らせいたします。

## 国際18世紀学会第13回グラーツ大会に参加して

小田部胤久 (東京大学)

2011年7月25日から29日にかけてグラーツで開催された第13回国際18世紀学会に参加する機会に恵まれた。日本からの発表者も多く、また鷺見洋一会員の組織した百科全書についてのセッション、長尾真一会員の組織した日韓共同セッションは私の参加したセッションの中でもとりわけ纏まりのある充実したものであったが、これらの内容については他の会員による報告に委ね、以下ではドイツ語による、ないしドイツ語圏にかかわるセッションを中心に、報告することにしたい。ちなみに、ドイツ語が公用語として採用されたのは第9回ミュンスター大会(1995年)以来のことである。

今回の会議の中心主題は「啓蒙の時代における時間」であったため、「時間」をめぐるセッションが多く組織された(以下敬省略)。

18世紀のメディア研究者である **Esther-Beate Körber** の組織したセッション「想起・形成・計画——18世紀のメディアにおける時間概念の成立」では、浜田真が「ヘルダーの歴史哲学とゲーテのモルフオロジーにおける時間表象」と題する報告において、1780年代のゲーテの自然研究とヘルダーの歴史哲学の共通性に着目し、直線的ではなく円環的な時間が両者の思想を特徴づける、と明快に論じた。**Guglielmo Gabiadni** は1790年代のゲーテとA.W.フンボルトがともに「混沌と夜」から「新たに形態化」が成立する過程に着目していたことに着目し、それを古代のコスモゴニーの復活として捉えた。

美術史研究者である **Edgar Lein** の組織したセッション「18世紀の美術における時間と時間性」において、**Claudia Steinhardt-Hirsch** は、マニヤスコがスケッチ風の筆遣いを好み、かつこの筆遣いに対応して一過的な時間を絵画の内容としていたことに着目し、ここに描かれている時間が17世紀のアルカディア的時間(プッサン)と異なって貴族の没落への批判的まなざしを前提としていること、そこには興隆と没落というヴィーコにもつながる円環的時間が見て取れることを明らかにした。**Michael Wenzel** は、ヴォルフエンビュッテル郊外に建てられたザルツダールム城(現存せず)に描かれたペレグリーニの天井画の中の「拘束されたクロノス」を取り上げ、この主題はそれ以前の破壊者としてのクロノス(すなわち古代の作品を断片化する時間)とは異なって、時間による破壊から芸術作品を守るという意味合いを持っていること、そしてそのことがこの城に併設された「絵画館」の成立と深く関わっていることを示した。**Verena Daniela Prandl** は、ヴェネツィアのドルフィン・パラッツォのティエポロの壁画がローマの歴史(とりわけ戦争の阻止、戦争の開始、戦争の終結、戦争の勝利という四つの主題)を描きつつそれをアレゴリー化していることを図像学的に明らかにし、また**Romana Filzmoser** はマシュー・ウィリアム・ピーターズの絵「リュディア」(1777年頃)が同時代の注文主の要求を満たしつつも(レノルズの教えに倣って)ティツィアーノのウェヌス像に依拠することで古代的なものと近代的なものとを統合している、と論じた。

「時間」と直接かかわるわけではないが、**Korduna Knaus** の組織したセッション「18世紀のオペラにおける『自己』と『他者』の表象」も興味深かった。とくに、**Michele Calella** の「18世紀のオペラ・ブッフアにおけるステレオタイプとしてのフランス的なもの」はこのセッションにおいてもっとも重要な視点を提供してくれた。**Calella** は、まず「シュタイアーマルクの民族表」に基づいて18世紀初頭におけるヨーロッパ諸民族に関する先入見を概観した上で、ペルゴレージ、ゴルドーニのオペラ・ブッフアにおいて、突然フランス(的なもの)が諷刺的に登場する場面を列挙し、そこでは通常恋におぼれる男性がメヌエットを伴って歌うことを説得的に明らかにした。そのほか、**Christine Siebert** は18世紀のオペラ・セリアにおける「異国人」の表象に着目し、「異国人」が虎やライオンといった動物になぞらえられたことを、メタステージョの台本「シリアのアドリアーノ(ハドリアヌス帝)」に即して明らかにし、また**Tatjana Markovic** は、ロシア語のオペラ "Fevej" (1786年)の登場人物「シベ

リアの皇帝タオ＝アウ」に即して、ヨーロッパとして自己を位置づけるロシアがいかにシベリアを異国として表象したのか、を論じた。また、Christina Urchueguia はグロスマンの「ヴェルトハイムのアーデルハイト」とブライムホーファーの「気球」という二つのジングシュピール台本を取り上げ、前者における良きトルコ人（ちなみに、このオペラではドイツ人のアーデルハイトのほか、スペイン、フランス、イギリス、イタリアの女性が登場し、それぞれの女性がステレオタイプ的な典型として機能する）、および後者における「真理」と「正義」のアレゴリー像のうちに「対抗世界」の表象を読み取り、「よきオリエンタリズム」の可能性について論じた。

Dietmar Till の組織したセッション「18世紀における弁論術の歴史についての新たな接近」では、特にOlaf Kramer の報告が興味を引いた。Kramer は通常弁論術＝修辞学を否定したと見られる疾風怒濤時代のゲーテの「シェイクスピアの日に」（1771年）を取り上げて、自由自在に書かれたかに見られるこのエッセイにおいてゲーテが実際には修辞学的表現法を縦横に駆使していること、とりわけ *evidentia* を目指す表現法を用いていることを明らかにし、弁論術＝修辞学がその役割を終えるのはゲーテの次の世代である、と結論づけた。また、Lily Tonger-Erk は従来の男性中心の弁論術の歴史記述を批判しつつ、18世紀において「家族への結びつき」「慎み」「心情の言語」が女性的なものとみなされていたこと、また女性的とみなされた *delectatio* を求める「会話」が弁論術から排除されていたことを指摘した。

17世紀末から18世紀初頭のドイツのいわゆる学校哲学における「自然法論」を専門とする Simon Grote の組織したセッション「初期ドイツ啓蒙における感情の理論」は、カント以前のドイツ語圏の哲学を集中的に扱う唯一のセッションであった。Grote は、ヴァイヒが『哲学辞典』（1726年）においてトマージウスにいたるまでの17世紀の感情の理論を批判したことを手がかりに、17世紀の感情論を、アパテイアを理想とするストア派と感情を肯定するペリパトス派との対立に即してまとめ、ヴァイヒがこの二つの派の対立を単なる言葉の上での対立に過ぎないとして退けた、と論じた。また、Syliane Malianowski-Charles は、バウムガルテンが「感情」を十分に主題化しなかったことの原因を、彼の美学が認識論に基づいている点に求め、David Pugh は、合理的心理学の文脈で「感情」について論じたクリスティアン・ヴォルフと対比して、バウムガルテンの弟子のマイヤーが経験に即して感情を論じたことを強調した。

Konstanze Baron と Daniel Winkler の組織したセッション「変革の中の悲劇——啓蒙の時代における悲劇的なものの美的・哲学的・政治的・形成」では、18世紀を通じてオイディプス像がどのように変遷したのかを追跡した Jan Bernhardt の報告「いつもまたオイディプス」と、ヴォルテールのイスラム観を主題とした Evan Meyer の報告が特に目を引いた。Bernhardt は、18世紀の前半にあっては、ソフォクレスの『オイディプス王』を古代の傑作とみなしつつも、その際「運命」の概念には言及しないゴットシェートや、『オイディプス王』を素朴にして非近代的として批判したヴォルテールの解釈が支配的であったのに対し、「疾風怒濤」時代が一つの転機となって（ちなみに、Bernhardt はゲーテやレンツを例として取り上げた）「悲劇」ではなく「悲劇的なもの」を主題とする傾向が生じ、これが自由と必然性（運命）の統一としての悲劇（的なもの）というシェリングの「哲学的書簡」（1795年）における解釈を可能にした、と説得的に論じた。また、Meyer は、まず18世紀においてイスラムについての実証的な知見が広まった経緯を示した上で、ヴォルテールが『習俗論』の中ではイスラムに対する（とりわけボシュエに由来する）先入見に反対して雄弁な詩人としてモハメッドを描きつつも、イスラムを主題とする劇（とりわけ『狂信あるいはモハメット』1743年）では先入見を利用していることを指摘した。イスラムをめぐる報告があまり多くなかった中で、Meyer の発表は重要な視点を提供するものであった。そのほか、Sebastian Donat は、アリストテレスの定義に従っても、また自殺を否定するキリスト教の狭義に従っても「悲劇」とはなりえないクレティアが、ヨーハン・エリアス・シュレーゲルによって悲劇の主人公となった次第を、とりわけ彼の作劇法に着目して明らかにしようと試みた。

その他のセッションでドイツ（語圏）にかかわる発表として印象に残っているものをいくつか列挙することにしたい。Piero Giordanetti は、古代の文学についてカントはほとんど何も知らない、というジンメル説を批判しつつ、『人間学講義』『論理学』、さらには遺稿の「レフレクシオーネン」を駆使しつつ、カントにおいてルクレティウス、ミルトンが大きな役割を果たしていることを明らかにした。Luca Valzesi は、カントの宗教論におけるキリストの「化体」のメタファーに着目し、身体とはカントにとってもはや（プラトンの伝統におけるように）罰ではなく、むしろ身体を持つキリストがカントにとって人間にとっての理想となる、すなわち、身体が *conditio humana* として捉えられている、と論じ、ここにカントの「唯物論」的可能性を見て取った。濱中春は、いわゆる「リヒテンベルクの図形」がいかなる媒体によって図像化されたのか、その変遷を追跡しつつ（ちなみに、リヒテンベルク自身の書物では輪郭線の表現されないメゾチントが用いられているが、その後は銅版などによって複製がなされ、輪郭線が強調されることとなった）、享受する美的なまなざしが知の一部となる次第を、さまざまの図像を示しつつ明らかにした。また、Ernie Hamm は、ゲーテのとりわけ70年代から80年代にかけての風景素描を彼の地質学研究と関係づけつつ、ゲーテにとっては言葉以上に描くことが重要であったこと、またゲーテの素描が具体的なものから抽象的なモデルへと移行する傾向を有していたことを示した。

私が聞くことのできたのは全体のうちのごく一部であり、また自らの関心に応じてセッションを選択したので、以上の報告から全体の傾向を語ることは慎みたい。ただし、会議が進行するうちに、果たしてこの学会は「国際」と名乗ってはいるものの本当に「国際」の名に値するのか、という問いが頭から離れなくなったのも事実である。そのことは今回の会議が旧西欧圏の中では極端に東に位置するグラーツで開かれたこととも無縁ではない。18世紀オーストリアの繁栄は、オーストリアがポーランドの力をも借りて1683年の第2次ヴィーン包囲を克服しイスラムの脅威から自らを解放したことによって準備されたものである。この点でイスラムとの関連は（今日におけるのとはもちろん根本的に異なるとはいえ）18世紀オーストリアにとっても重要な意味を持っていたはずであるが、こうした問題が今回の会議において十分に論じられたとはいえないように思われる。イスラム圏からの参加者が少なかったことも、こうした傾向に拍車をかけた一因であろう。また、長尾真一会員が組織した日韓共同セッション「東西の公共知」を除いて東アジアが真に話題となることもほとんどなかった。この意味で、「国際18世紀学会」は未だなおヨーロッパ中心主義を引きずっているとはいえないであろうか。もちろん、この学会が18世紀ヨーロッパの最良の部分を発展的に継承するものであることはいまでもないのだが。

個々のセッションには10名から30名ほどの参加者が集まった。発表のあとで質疑応答するには丁度良い参加者の数であった。同一のセッションに英仏独三カ国語が混じることも少なくなかったが、ディスカッションは原則として発表者の言語に応じて行われた。三カ国語を自由に駆使する研究者の多さには、今更ながら驚かされる。また、すべてのセッションは同一の建物で行われたため、会場間の移動にもそれほど困難はなかった。ただし、一つのセッション（1時間半）に3人ないし4人が割り当てられたため、1人あたりの発表時間がセッションによって異なったこと、また欠席者が1割ほどいたためにプログラムがその場でかなり変更されたこと、これは組織の上での問題点であった。

私は1999年のダブリン大会以来12年ぶりにこの学会に参加した。91年のブリストル大会、95年のミュンスター大会で知り合った私と同じ、ないし少し若い世代のかつての常連が、もうこの学会を卒業してしまったのか、ほとんど姿を見せなかったことに、多少淋しさも感じた。わずかの例外はミラノ大学の Piero Giordanetti（彼は PhD 版の『判断力批判』の編集に携わっており、今では有数のカント研究者である）で、彼とミュンスター大会以来16年ぶりに会えたのは嬉しかった。「カントのように旅行をしない」と自称していた彼に、最近も旅行をしないのか、と聞いたところ、「イタリアの大学も事情が変わった。最近ではイタリア語で論文を書いても全く評価されない。英・独・仏で書かないと点数にならない。そこで久しぶりに外国に出てきた。ベルルスコーニが大学を作る時代なので」と自

嘲気味に答えてくれた。イタリアも遅ればせながら「点検評価」の時代に突入したということなのであろう。

参加者もおそらくは900人を超え、発表の主題もきわめて多岐にわたるこの会議では、郷土自慢のような発表も多く、専門性という点ではどうしても不満の残ることが多い。また、規模が大きいゆえに、学会はお祭りの色彩を帯びる。旅行を兼ねて短い夏休みを楽しみたい、という気持ちも加わることであろう。もちろん、そのことが悪いわけではない。この学会の特性をわきまえ、この会議をうまく利用するならば、視野を広げ、知人・友人を得るためのまたとない機会となろう。さらに、日本からの参加者の発表を聞くことも、大きな楽しみである。実際、今回は日本からの参加者が多かった。とりわけ橋本周子会員、大橋完太郎会員ら若手研究者が力のこもった発表を行ったことは特筆すべきである。残念ながら福田奈津子会員、隠岐さや香会員が報告したセッション「ヨーロッパとアジアにおけるニュートン主義の比較研究」は他のセッションに参加していたため聞くことができなかったが、こうしたセッションが可能であったということ自体、若手研究者の層が厚いことを示唆している。4年後のロッテルダム大会にはさらに多くの会員が参加されることを願いつつ、報告を終えることにしたい。

## 第13回国際18世紀学会に参加して

逸見龍生（新潟大学）

国際学会への参加からえる収穫のひとつは、国や地域ごとの差異を抱懐しつつも、生きた研究の関心や方向のあり方が、そこに集まる研究者の具体的な身体の所作、社交の振る舞いを通じておのずと判明になることにある。これだけは、海外から研究書や論文を取り寄せて読んでいざばかりでは一向にみえてこない国際学会のおもしろさであろう。

7月25日（月）から7月29日（金）まで、オーストリア、グラーツ大学で開催された国際18世紀学会に参加し、その思いをあらたにした。中世以来の伝統を感じさせる大学街で行われた今回の学会も、5日間で1400を優に超える報告が行われるきわめて大規模なものであった。多いときには同時間帯に数十のシンポジウムが開かれ、自分の目当ての発表を目指し、慣れぬ大学構内を何度も迷いながら文字通り駆け抜けるようにして連日を過ごした。一月ほど経ったいまも、会場の内外で言葉を交わした世界各地の研究者たちとの邂逅の場面が、その時の昂揚した気分とともに、明瞭に思い出されてくる。

最初に、自分の専門に近いフランスを始めとする他国の研究者たちの発表の中で、特に注目したものをいくつか報告したい。モンペリエ大学のMaria Susana Seguinの主宰した「啓蒙と地下文書における古代哲学」は、17世紀末から18世紀前半にかけてヨーロッパ各地で流布した哲学的地下文書をめぐる、今回は唯一のセッションであった。Péter Balazsによる、ハンガリーにおける地下文書の生産と伝播に着目した報告は、まさにグラーツ大学という土地柄ならではの耳新しい主題であったし、17世紀後半のオランダ人商人Dirk Santvoortのデカルト=コペルニクスの機械論宇宙生成論について、近年批評校訂版を仕上げたEmilio Sergioの発表も、著者の古代=ルネサンス的秘教の系譜の側面を指摘して進展を示した。Paolo Quintiliは飛び入りでの参加となったが、アリストテレスの形相概念の重要性を地下文書の様々な著作を例に取り上げた。またIsraelの同題の著書を通じ近年にわかに取り上げられるようになった、いわゆる「ラディカル啓蒙Radical Enlightenment」の概念に関して、その問題や矛盾を丁寧に地下文書研究の立場から突いたGianni Paganiniの報告は説得的に感じられた。最初に報告したGeneviève Artigas-Menantは、国際研究誌『地下文書書簡』の編集主幹の一人で、フランス地下文書研究の中心人物である。彼女の「ロベール・シャールにおける古代哲学の役割」は、キリスト教神学的言説に対する対抗原理として地下文書サークルにおいて古代哲学がいかに利用されたかを余すことなく示すもので、セッションの主題の意義を最も明晰に例証していた。

Myrtille Mericam-Bourdetの組織した「歴史家ヴォルテール」では、近年その「哲学的歴史家」としての側面にますます光があてられるようになったヴォルテールについて、全集編纂中のチームによって多方面から総括的考察が行われた。その焦点のひとつは、座長を務めたMericam-Bourdetも強調したように、〈フィロゾフ〉たちの牙城18世紀フランスにおいてすら、しかもその大立者であるヴォルテールにおいてもなお見られる「哲学」と「歴史」の関係の予想以上に複雑な相互嵌入であり、しばしば近年唱えられるように安易に両者を切断したり、水と油のように対立させたりしてすませるわけにはいかない。この点については、同セッションでヴォルテールの*Annales de l'Empire*に関しG rard Laudinが説得的に論じてもいたとおり、ヴォルテールがその哲学的歴史書を書くにあたって終始一貫して参照し、利用した同時代の学識的歴史家(historiens  rudits)たちのテキストを調査し、本文の厳密な比較の上に立たなければ、確実なことは何一ついえないのである。

「時間」を共通主題とする今回の大会であったが、上記のセッションでも端的に見られるように、「時間」の主題は「歴史」や「歴史記述」といった問題だけにとどまらず、学問体系や表象、テキスト、主題が生成していく過程やその受容、伝播などといった、さまざまな特定の場における変容や成長のダイナミズムにも同時に焦点があてられたのは、いわば当然のことであつたろう。Alberto PostigliolaとPaolo Quintiliが組織・座長を務めた「時間の中のテキスト——伝達、流通、版」は本文校訂批評を主題に、テキストの内包する時間の問題を主題とする興味深いものであつた。中でもMaria Susana Seguinの「マニユスクリから印刷物へ——フォントネルの科学アカデミー向け文書の流通」は筆者には有益だつた。いくつかの理神論や無神論的地下文書の著者としての秘匿された顔を持ちながら、世間的には王立科学アカデミー終身書記に就き、会員からの科学報告を要約形式で整理し、これを「提要」としてアカデミーの定期行物にまとめる立場にあつたフォントネルが、この場を利用していかに伝承や規範に対するアイロニカルな秩序の転移の場へと元のテキストの意味を変容させていったかが詳細に論じられたのである。通常私たちが考える以上に、科学アカデミーの言説は非公式的な転覆の場となっていたわけである。ディドロを筆頭に、百科全書派たちがフォントネルのアカデミー「提要」をかれらの辞書のうちに取り入れていたのは周知の通りであるが、まさしくSeguinの指摘するこのフォントネルの言説実践は、『百科全書』における言語問題のプロトタイプのひとつとして読めるように思われる。

「時間」の問題とは必ずしも関わりはないが、『百科全書』といえば、アンシャン・レヂーム期の数多くの辞書・辞典のデジタルデータベースを構築しているシカゴ大学ARTFLプロジェクトが中心となつたセッション「ARTF『百科全書』電子版——エディションからナビゲーションへ」があり、筆者の属する本邦の研究プロジェクトとの重なりもあり、リーダーの鷺見洋一会員以下、大いに関心(と正直には不安のほうが大きかつたが)を持って聞いた。潤沢な予算と人員、機材に恵まれた中で彼らの進めている電子版データベースの進捗はまさしく日進月歩であり、多くの点で目を瞠らせられた。だが同時に、どうやら私たちが一点集中型で仕事を飽きずに続けていくことで、別種の貢献をすることができそうだと胸をなで下ろしたのも事実である。

以下は、主に日本の会員たちの現地での活動内容について発表順に列挙しておきたい。私にとっては前回のモンペリエ大会以来の四年ぶりの大会であつたが、若手研究者の参加数の増加を中心に、前回よりも多くの本学会会員が参加したように思う。なお、彼らの発表は時間の許す限り聴きに行ったつもりだが、それでもすべての発表の場にたちあうことができたわけではないのはお断りしておく。

27日水曜日午前9時のセッションで、主宰・座長：鷺見洋一会員によるシンポジウム「『百科全書』典拠研究」が開催され、鷺見会員による趣旨説明の後、小関武史会員、逸見、寺田元一会員がそれぞれ仏語で発表をおこなつた。小関会員は『百科全書』における地理項目の重層的な典拠、逸見はジェームズ『医学総合事典』を典拠とする『百科全書』項目の確定、寺田会員はチェンバーズ『サイクロペディア』によるその典拠たるフランス科学アカデミーの翻訳過程に焦点を当てた。いずれの発表も、ささやかながら文献学的にはいくつかの新発見を含むものであつたと自負している。

同日午前11時から、阿尾安泰会員主宰、増田真会員を座長とする「S・A・ティソ再読：ティソにおけるセクシュアリティの複数の解釈可能性」が開かれた。発表には阿尾会員のほか、辻部大介会員と関谷一彦会員、そして他国の発表者も一名が参加。残念ながら他のシンポジウムと重複したため、筆者が直接見聞することはできなかったが、聴衆も多く、質疑応答も含めてたいへん盛況であったと聞く。阿尾会員は「ティソの『オナニスム』分析」、辻部会員は「作家ティソ、その文化的基盤と説得の技術」、関谷会員は「18世紀におけるフランス、および日本におけるオナニスムの捉えられ方」についてそれぞれ仏語で発表した。

木曜日は午後2時半から6時までを一杯に使い、今回の日韓18世紀学会共同企画の第一陣となった「東西における公共知：比較的パースペクティブ」が開催された。主宰は長尾伸一会員、座長は長尾会員と韓国学会前会長のHi Kyung Moon会員の両名である。要所を締めた長尾会員の見事な差配のなか、前半部の第1セッションで、本学会からはクレール・フォベルグ会員（「『百科全書』はユートピアか」）、高橋博巳会員（「東アジアにおける『文芸共和国』」）、玉田敦子会員（「文体の速度と啓蒙の逆説——18世紀修辞学理論に見られる仏英比較」）、橋本周子会員（「文芸サークルと料理書——美食的言説をめぐる集会」）の4名が、それぞれ英語で発表を行う。

金曜日の午前、9時から12時30分までの午前の2つのセッションは、日韓共同企画の第二弾、Julie Choi韓国学会会員を主宰・座長とする「東西における時間の内と外」があった。日本からは、増田真会員が「ルソーにおけるリズムの理論と夢想の詩学」、川和田晶子氏による「18世紀末日本における時間意識の変化」についてそれぞれ仏語、英語による発表をおこなった。ルソーの『言語起源論』の新たな再解釈を提示した増田会員の報告には、ソルボンヌ大学のムナン教授がそのコメントのなかで「きわめて有望なアプローチ」と評価していた。

その日の午前にはこれと並行して「『両インド史』編纂と（再）読解——研究の現状と展望」と題されたシンポジウムが行われ、本学会から王寺賢太会員が参加、仏語による発表をし（「戦争、規律訓練、愛国主義——『両インド史』による近代ヨーロッパの系譜学」）、会場からの質問を雄弁に捌いてみせたのが記憶に鮮やかである。午後、馬場朗会員によるディドロおよびファルコネに関する英語発表（「芸術作品における後世ないし未来を決定するのはいったい誰か——ディドロとプロメテウスのピュグマリオンたるファルコネ」）、大橋完太郎会員によるビュフォンに関する英語発表（「『文体論』との関連から見る博物誌におけるビュフォンの自然の歴史化」）がそれぞれ単独に行われている。

同日最終日の午後の二つのセッション時間を通して行われたのは、隠岐さや香会員主宰、隠岐会員と長尾会員を座長とする「ヨーロッパとアジアにおけるニュートン主義の比較研究」であった。本学会からは、第1セッションで福田名津子会員（「アダム・ファーガソン道徳哲学の方法」）、西本和見氏（「20世紀合理的選択理論の先駆者としてのコンドルセ」）、そして隠岐会員（ビュフォンの道徳的算術からコンドルセの社会的数学まで——フランスの文脈におけるニュートン主義の自己固有化に関する事例研究」）が英語による発表を行った。途中、キース＝マイケル・ベーカー会長が会場に姿を見せ、熱心に報告を聴いていたことを付け加えておく。会場からは斎藤渉会員も英語で質疑に参加した。

このように、英仏語による報告に限っても、本学会から20名余の会員が参加し、日本で進めてきた研究の成果を広く国際レベルで発信しえたことになる。高く評価され、会場との質疑応答がきわめて活発に行われたセッションがいくつもあったのは喜ばしい限りだった。フランスを主たるフィールドとする研究者たちが、英語を使って発表するケースが多かったことも、今回の大会の顕著な特徴であったように思われる。若手も果敢に挑戦した。どのセッションにおいても、会員の国際的なネットワークがこの大会を機会にいつそう深まったことを、会場で実感としてもちえたことは大きな収穫であった。

国際学会という学問の制度的場に焦点を当てたとき、特筆すべきであったのは、「東と西」という

視座を導入して、前回のモンペリエ学会に引き続き、複数のシンポジウムを主宰した長尾伸一会員を中心とするグループの活躍ぶりであったろう。韓国学会との日韓共同発表は今回はほぼ丸一日がかりで行われ、モンペリエのときに比べてもよりと厚みと拮抗りをまし、明らかに独特の存在感を放つものとなった。それは「ニュートン主義」をめぐる日本の研究者と英仏の研究者が同じセッションのなかで有意義な対話を交わした、隠岐会員の率いた最終日午後のシンポジウムにおいても際立っていた。18世紀という時代の研究を通じ、多様で異質なもののへの〈共感〉を涵養してきたことの結実とみてもよいかもしれないが、やはりそれは何よりも、ヨーロッパを対象とした学を中心に展開しがちな国際学会において、アジアという問題設定をして独自の研究ネットワークを築き、着実に研究体制を構築してきた同グループの努力のたまものである。いたずらに「西」に自己同一化するのでもなく、かといって「東」の文化ナショナリズムに埋没するのでもない、「東と西」という異なる二つの文化の「国際的転位」を正面から引き受けようとする同グループの視点の構築は、水田洋会員がかねてより唱えられていた学問的立場の継承でもあるだろう。今回の成功は、同グループにとってだけではなく、本学会の将来の国際共同研究のあり方をうらなう、確かな希望となったのではないか。

4年後の国際18世紀学会大会の開催地はロッテルダムになったと聞く。本大会で蒔いた種がますます豊かに結実することを願う。



## エッセー

### 18世紀のロシア文学、ジャン＝ジャック・ルソーの在る風景

金沢美知子（東京大学）

未知の領域や異文化への憧憬は学問の原動力である。とはいえ、めざす対象との距たりが大き過ぎでは学ぶ心もすくんでしまうではないか。

18世紀ロシアは、我々にとって遠からず近すぎず、ほどよい距離の世界である。研究には恰好の対象と言えるかもしれない。ヨーロッパの18世紀は既に成熟の段階にさしかかった時代だが、ロシアの18世紀はまだ中世の記憶も鮮やかな、近代の黎明期であった。18世紀ロシア社会の心性、メンタリテイへのアプローチは、古いモノクロ写真が少しずつ色を帯びていくのを眺める時のような、心地よい感動を与えてくれるのである。

もし「外国書の輸入」という手がかりがなかったら、18世紀のロシア社会を理解することは今より遙かに困難であったに違いない。18世紀のロシア社会において新しい精神文化が急速に成長した背景には、「外国書の輸入と翻訳」があった。特に、世紀初めのピョートル1世の欧化政策を受け、世紀後半には事業の成果が社会の諸機構の細部にまで反映されるようになって（民間印刷所開設の許可、外国書輸入代理店の設置、外務参議会翻訳局の設置、書庫設備の充実等）、外国書の需要と供給は格段に増大した。分厚い18世紀出版目録には古典から同時代に至る膨大な文献とその著者の名前が氾濫している。

そうした外国文献の情報の氾濫の中で、「ジャン＝ジャック・ルソー」は最も輝かしい名前としてロシア文化の歴史に刻まれてきた。受容のあり方は時とともに変化し、ルソーの名声も不滅というわけではなかった。この作家の受容の変遷には18世紀ロシア社会（とはいっても当時のロシア人口の1割にも満たない、エリート知識層のコミュニティのことである）の心性が映し出されていて、興味深い。



18世紀後半ロシアのエリートの多くはルソーの著作をオリジナルで知っていたが、それと並行して既に1760年代初めには翻訳も登場した。ロシアのルソー受容第1期ともいえるこの時期に大きな貢献を為したのは、エカテリーナ2世の寵臣として執政に関与していたあのグリゴリー・ポチョムキンの血縁者、パーヴェル・セルゲーヴィチ・ポチョムキン（1743—96）であった。ポチョムキンにはルソーをロシア社会に紹介するための膨大なプランがあったが、実現したのはほんの一部だった。彼のルソー翻訳の代表的なものとしては、1768年にモスクワ大学附属印刷所から出版した『学問芸術論』（1750）、1769年出版の『新エロイーズ』（1861）第1部がある。ポチョムキンが第1部のみ翻訳したのは、彼のルソー紹介の主な目的が感情の自由の賛美をもって読者を啓蒙することであり、それに相応しいのは第1部であると考えたためでもあった。『新エロイーズ』第1部の翻訳はロシアのルソー受容を新たな段階へ推し進める契機となったが、訳者ポチョムキン自身はこの作品が持つ多様な可能性の一部に共感していたにすぎなかった。受容の最初期においては、ポチョムキンのようなルソー賛美者もルソーに峻烈な批判をくり出した多くのアカデミー会員たちも、ルソーの世界観や人間社会に対する理解の枠組みに注目していたのである。

フョードル・アレクサンドロヴィチ・エミン（1735頃—70）が小説『エルネストとドラーヴラの書簡集』（1766）を発表した頃に、ロシアのルソー受容は次の段階に入ったと考えられる。複雑にうねりながら読む者の気分を昂揚させるルソーの文体が、その思想とは別個に評価され、人気を集め始めた時期でもあった。

エミンという作家は残念なことにきわめて知名度が低いのだが、ロシア小説の近代化に大きな役割を果たした人物であることは間違いない。出自と前半生に関する情報は驚くほど少なく、その伝記は多くの改竄と憶測を含むものであった。生地もポーランド、南ロシアの国境近辺、旅券記載のコンスタンティノープル等諸説あり、確定できない。ただ、トルコで幼児期を過ごした後、故郷を離れてヨーロッパ各地を放浪したこと、最終的には英国でロシア政府の要人と出会って正教に改宗し、1761年、雇用を求めてロンドンからペテルブルグに渡ったことが知られている。言ってみれば、「外国人」だった。エミンはペテルブルグで政府の翻訳官として採用されたが1763年には退職し、エカテリーナ2世の私設翻訳者などを務めながら、文学を仕事とするようになっていった。彼の文学活動の中心は外国書、特に冒険小説の翻訳で、やがて自身も冒険小説を書き始める。そして冒険小説の翻訳と創作を数点発表した後、最後に書簡体小説のジャンルに挑戦した。こうして生まれたのがロシアで最初の書簡体小説『エルネストとドラーヴラの書簡集』である。

『エルネストとドラーヴラ』は『新エロイーズ』に想を得て、愛し合う男女の心情の描写を書簡形式で実現しようとした作品で、作家自身が序文でそれを明言している。しかし当然ながら、それまでエミンが得意としていた冒険小説の痕跡がこの作品から一気に払拭されたわけではなかった。たとえば第1のエルネストの手紙では彼の放浪の半生がひととおり報告されているが、物語の冒頭での主人公の経歴の紹介は本家の『新エロイーズ』には見られず、むしろ16世紀以来のピカレスク小説を想起させるものだった。『エルネストとドラーヴラ』は冒険譚を「思考と感情についての物語」に書きかえたところに生まれた作品といえる。作家エミンのこうした意匠の背景にはセンチメンタリズムに対する強い関心があったと思われ、現に、手紙の文面の感傷性が優先されるあまり、物語の統一が破綻することにもなった。『新エロイーズ』へのエミンの共感は、なによりもルソーの饒舌で感傷的な文体に対してのものだったのだろう。

ルソーの書き手たちと張り合うかのように、『エルネストとドラーヴラ』の主人公たちもまた饒舌な語り手ぶりを発揮する。彼らは「互いに自分の思想を書き送ることに全人生を費やし、自分の思想を異性誘惑の手段と見なしているような輩」であり、『エルネストとドラーヴラの書簡集』はそうした輩がロシアの小説に本格的に登場した初めての例であった。

『新エロイズ』の翻訳とエミン『エルネストとドラーヴラ』の登場を経て二十数年後、18世紀末のロシアにはルソー受容の次の新たな風景がひろがっていた。エミンは去り、カラムジンを中心とするロシア・センチメンタリズムの作家たちが活動していた時代であった。

ヴラジミール・ワシーリエヴィチ・イズマイロフ（1773-1830）の『ロストフ湖』（1795）は同時代の小説の中でもとりわけ「ルソーの在る風景」が際立った作品である。語り手の「私」はロストフに逗留中の旅人で、五月の夕暮れ時に湖岸を散策しながら甘い感傷に浸っていた。随所で美しい場所、ロマンティックな恋人達の隠れ処、花咲く岸辺等に出会い、夢を膨らませるのだった。そしてこのお決まりのセンチメンタリズムは、「たぶんこれらの場所にはジャン・ジャック・ルソーと若いヴェルネで名高いレマン湖と似たところはまったくなかったのだが、それでも私は新たなジュリをそこに移り住ませ、自分が第二のサン＝ブルーとなっていっしょに暮らすことを想像してみた」という記述によって増幅されることになる。

語り手がゆきずりの若者から聞いたロマンスの中にもルソーが登場する。夕暮れ時の散歩の途上、若者はロストフ湖畔でひとりの百姓娘を見かけた。紅味のさした色白の面ざし、青い目、高い胸、肩に掛かる黒髪、簡素な身なり、、、羊飼いに身をやつした女神の如き姿が若者を惹きつける。しかし、娘の美しさが際立って見えたのは何よりも、彼女が本を手にして、物語に心奪われた様子で想いに沈んでいたからであった。この光景に若者は恍惚となり、長い間探し求めていたものをついに見出したことを感じる。この時点で、察しのよい当時の読者なら皆、本が若者と語り手の愛読書、ルソーの『新エロイズ』であることに気づいたはずである。若者はその夜、逗留した村の民家で娘と再会を果たし、そこで初めて書物の名前が明かされる。彼女が『新エロイズ』をフランス語で読み、日々ルソーの世界に耽溺していることを知って、若者の心は震えた、、、。

こうして『ロストフ湖』には人名、地名や書物が登場し、登場人物と読者の感傷を昂進させる役割を果たしている。物語を演出し、作品の構想を支えているのはもはやルソーの思想や文体ではなく、ルソーに関わる諸表象である。皮肉なことに、『新エロイズ』が最も普及していたと思われるこの時期には、ルソー自身ではなくルソーに纏わるさまざまな「安価」なイメージがロシアの読者の惹きつけていたのだった。18世紀末のロシアの読者のこの心変わりの背景には、1770年代末からスターンやリチャードソンの小説、ゲーテ『ウェルテル』等、多くの読み物が紹介され、それらとの複合的影響関係の中でルソーが受容されるようになった経緯があった。

18世紀ロシアにおけるルソー受容の多様性は19世紀にも受け継がれた。一見相対立する作家、ドストエフスキーとトルストイのいずれの文学においてもルソーが輝かしい名前であり続けたのは、不思議なことではなかったのである。

## ゴンクールの歌麿論、そして、グラヴロ論・・・18世紀のファッションを見る眼

木村三郎（日本大学）

### I. ゴンクールの歌麿論

日本の18世紀末に活躍した浮世絵師、歌麿の「青楼十二時」に描かれた、遊女の着衣について、フランスの作家エドモン・ド・ゴンクール兄弟の記述がある。この記述を紹介した、永井荷風の訳文の一節を引用して見よう。

「此等衣装の色彩を見れば、日本の女性は欧州人が鮮明なる色を欲するとは全く異なって、遙かに芸術的な天然物其のままの色彩を好む事が分る。日本の女性が其の身に帯びやうとする絹布の白さは、魚類の腹の白さ（即ち銀白色）であり、又淡紅色は紅味を帯びた雪の色（即ち蒼白き淡紅色）である。藍は藍がかつた雪の色（即ち明い藍）と又空（そら）の黒さ（即ち濁った藍）及び桃色を照す月色（即ち紅味を帯びた藍）とである。・・・」

（『三田文学』1913年9月、p.126-127）

歌麿の美人画といえ、すぐに脳裏に浮かぶ我々ならば、この記述がどの作品を対象に書かれたかは別にして、彼の描いた女性の着衣にこうした色彩で描かれたディテールがあっても不思議には思わないだろう。

しかし、ここで少し、この文章に眼を凝らしてみたい。着物の彩りの部分部分に、ゆっくりと視線を巡らしている、作家の姿が浮かんでくる。指摘した箇所の引用をここで止めてしまうことがいささかためらわれる程、この作家は、この浮世絵師の描き出した衣装の細部に悠然と目を配り、個々のモチーフの描写を並々ならぬ注意力でつみ重ねて行く。

念のために、手元にある *Utamaro* のフランス語の原典と照合しても、そこに認められる色調の微妙な差異をあげつらう単語の羅列には、生地の基調色の上に配られた、染師の心配りをひとつひとつ分別して、それぞれに言葉を与えていく、作家の観察眼が働いている。変化するモチーフとたゆたう色彩の織り成す世界に、言葉を丁寧に紡ぎ出して、貼り付けてゆくかのようなのである。筆者には、それを邦語に置き換えるにも、ゴンクールが邦訳は、やはり、江戸趣味がまだ息づいていた、大正初年の荷風の頭脳にあった綾のある語彙がなくてはならない、という思いが強いのは、こうした事情によるのである。

絵画に描かれたものを言語に移し替えて行く作業を、美術史では「作品記述」*description* と呼ぶが、ここにあるものは、並みの描写力ではない。大学院生に、ゴンクールの原文を渡して、一方で、永井荷風の美文の邦訳とも照合させながら、一語一語、訳語を探す作業を試みたことがあった。そうした検証作業を試みた上でも、林忠正の支援があったにせよ、この眼はただものではないのである。

ちなみに、作家ゴンクール兄弟の美術批評は、その浮世絵研究で知られているだけでない。フランス美術史においては、その『18世紀の美術』*L'art du dix-huitième siècle* という著作で、一層その存在感を持っている。この著作では、シャルダン、ブーシェ、といったこの世紀の、王立絵画彫刻アカデミーの中核の位置で活躍した画家たちについての、論考で知られている。雅艶の画家ワトーについての論考(1860)もある。

ところで、ワトーの作品を眺めるときにしばしば使われる言葉に、*à la Watteau* という言い回しがある。この「ワトー風に」という言葉は、彼の作品に描き込まれた女性たちの衣裳について使われる。たとえば、ルーヴル美術館にある、《シテール島からの帰還（別称、船出）》の右手前景に描き込まれた、中国風の扇子を手にした座る女性や、半ば、見返り美人風貴婦人の、とりわけ、その衣紋表現に施された、華やかで繊細な襷の表現についていわれる。絹擦れの音を油彩で描き出したような、そんな女性たちのファッションこそ、この時代は、鑑賞の対象であったのである（ちなみに、荷風の唯美主義を引き継いだ、作家、三島由紀夫が、この絵について作品記述を、一編の詩に昇華させていることはよく知られている。『小説家の休暇』）。こうしたことを思い出すと、歌麿の描く女性像のファッションへの、ゴンクールの、熱く時に粘り着くような視線は、18世紀の美的な趣味で鍛えられ、研ぎ澄まされた、作家の感性だけが生み出し得たものだったようである。

## II. ゴンクールのグラヴロ論

ところで、この作家の著述の中で、わが国では、余り紹介がなされていない仕事に、18世紀フランスの、一連の版画家研究がある。美術史研究では地味な論考でもあり、*L'art du dix-huitième siècle* が、近年、たとえば英語版などで抄録して刊行される際には、切り落とされる部分である。

百科全書の扉絵の版画を描いたことで知られるコシャン Cochin、グラヴロ Gravelot、ドゥビュクール Debucourt、などの版画家についての研究である。芸術家としての歴史的な存在感が大きな画家たちとは異なって、彼らは、しばしば、いささか印象の弱いという言葉で語られる。

たとえば、ここで、今触れた、ユベール=フランソワ・グラヴロ、別称、ブルギニオン・ダンヴィル (GRAVELOT, Hubert-François Bourguignon d'Anville)、という版画家の作品を確認して見よう。グラヴロは、ルソー研究者ならばご存じと思われる、ガルニエ版『ジュリ、あるいは新エロイーズ』(1960, Pomeau) の中にその挿し絵が、再録されている。なかでも、ガルニエ版の表紙にも使われている、『初めての口づけ』(図参照)と題された版画がよく知られている。ちなみに、下記のUtpictura18というHPで、より鮮明な版画が確認できるのでご覧いただきたい。この情景についての、文学史上の分析に深入りするほどの基礎教養を筆者は持ち合わせていない。その議論は、学会のご専門家諸氏に譲るとして、ここでは、版画分析の方から、若干の言葉を添えておきたい。



1760-61年、エッチング

手前の横顔を見せる女性は貴族の令嬢ジュリ。恋をしている平民の家庭教師サン・ブルーとの初めての接吻が終わった直後の情景である。気絶しかねないようなその瞬間の緊張感を演出した図柄である。下絵素描をグラヴロが、版刻は、ルミールが行っている。

ガルニエ版に再録された1960年刊行の版画群は、むしろ黒ずんでしまっているといった方がよく、フランス国立図書館所蔵のオリジナル版画の持つ、ベンヤミンのいう生(なま)の切れ味の感覚は伝わらない。人物も小振りで、かわいらしさが目立つ女性像が多い。

ところで、『初めての接吻』は、木立の中で起こる恋の情景が、様々な斜線の組み合わせを試みた線描で描かれている。ドレスにはふくよかで柔らかい量感が描き出され、その着衣には、ワトー風ともいえる髷の明暗についての細やかな配慮がある。

ここで話をゴンクールに戻したい。彼が書いたグラヴロ論で指摘したいもう一つの点は、この論考が単なる伝記ではなく、脚注を施し、豊かな一次資料による情報を挿入した研究をなしていることである。ちなみに、ゴンクール全集として再刊される際(1934年以前)には、さらに、作品カタログを付録として追加している。

ゴンクールは、1848年以来、400点を越える素描と版画を収集していたといわれる。

その中には、無論、グラヴロのオリジナル作品も含まれていたであろう。そうした20年にわたる経験と蓄積を背景にして、文士としての記述能力にたけた美術批評の力だけでなく、歴史主義的な学術性にこだわった著作として刊行し得た事実は、興味深い。思うに、『版画研究ハンド・ブック』*Manuel de l'estampe* (1854-)を刊行する傍ら、ガゼット・デ・ボザール誌*Gazette des Beaux-Arts*を創刊し、その編集長を勤めていたシャルル・ブラン(C.Blanc)の影響が濃厚ではないか、と筆者は想定している。

コレクターだけでなく、自らエッチング制作者でもあったこの作家は、1860年にワトー論を、68年にグラヴロ論を書き、鍛え上げられた目利きの眼で、91年に、歌麿論を書き上げることとなる。日本のゴンクールともいえる、荷風を突き動かした背景には、こうした事情があったようである。

註

1, グラヴロの版画

<http://galatea.univ-tlse2.fr/pictura/UtpicturaServeur/GenerateurNotice.php?numnotice=B0852&derniere>

2. 以下の拙論に、若干のグラヴロ紹介を行っている。

「版画家ユベール=フランソワ・グラヴロの挿絵についてのノート」『日本大学芸術学部紀要』2007, 年 46号,p.55-62(<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007055864>)

「フランス近代における《慈愛の寓意》と炎の図像について」『同紀要』近刊予定



## 事務局より

### 国際18世紀学会役員選挙について

国際18世紀学会の役員選挙が無事行われ、その結果が同学会サイトに掲載されています。小田部会員も執行委員に当選しました。ご支援ありがとうございます。

### 国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。( <http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版では Répertoire という項目です。そこから人名や国名に従って探せます。)

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者 (Pascal Bastien. [admin@isecs.org](mailto:admin@isecs.org)) に連絡してください。

(英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。)

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方は、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、ご自分のお名前を登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。(上記サイトの画面上部のISECS-directボタンから名簿にアクセスし、英語版でRegistration、フランス語版でInscriptionというボタンから登録ページにアクセスできます。)

## イタリアより新雑誌（電子ジャーナル）創刊のお知らせ。

モデナ（イタリア）の「ムラトリー研究センター（Centro di studi muratoriani）」より、ムラトリー研究の新雑誌 MURATORIANA ONLINE が、本年11月に創刊予定であるとの連絡が、事務局宛にありましたのでお知らせします。ムラトリー(L. A. Muratori, 1672-1750) は、18世紀前半のイタリアを代表する歴史家・思想家です。関心をお持ちの会員は研究センターのホームページ

<http://www.centrostudimuratoriani.it/> をご覧ください。

（このお知らせはイタリアから事務局に届いたものを堀田誠三会員に編集していただいたものです。）

## 投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限ります。）

## 共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

## 学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月初めまでに、4月号は2月初め頃までに、9月号は7月半ばまでにご希望をお寄せください。）

## 訂正

「学会ニュース」前号に掲載された、今野佳代子会員のエッセーに以下の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

7 ページ下から11行目 （誤） フェルセン （正） フェルセン

9 ページ9行目 （誤） フェルエ （正） フェルミエ

## 年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

### 会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

### 寄付のお願い

別紙要領をご覧ください。（昨年の寄付要領に記載されていた学会の口座番号に間違いがあったようです。大変失礼しました。今回お届けするのは訂正版です。）

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

### メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、斉藤涉、関谷一彦(年報担当)、武田将明、田邊玲子(年報担当)、寺田元一、長尾伸一(東アジア交流担当)、馬場朗、逸見龍生、堀田誠三、増田真(代表幹事)、

会計監査：玉田敦子 中島ひかる

日本18世紀学会ニュース 第67号 2011年9月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>